難易構文とθ役割

石　井　隆　之

0．はじめに

The *tough*-construction is tough to explain.———

上のジョークにあるように，「難易構文」は原理的説明が困難であると思われる。だからこそ，これまで様々な説明がなされてきた。解読していくにつれ，新たな疑問が生じてくるのが現状である。“There are more questions than answers.” という状況の中で，one answer を試みるのが本稿の狙いである。

難易構文には，次のような特徴がある。空所を下線で示す。

(1) a．* The park was tough for there to be men sitting in __.

b．* The book was hard for Bill to be sent __ by Alice.

c．* The money was tough for us to claim that John stole __.

d．* John was hard for us to believe __ to be honest.

e．* The article was tough for Bill for Mary to publish __.

[以上 Nanni (1978)]

f．John is being easy to please __.

g．John is intentionally easy to please __.

[以上 Lasnik and Fiengo (1974)]

h．Joe is impossible to talk to __ because he's as stubborn as a mule.

i．* Joe is impossible to talk to __ because he's out of town.

j．Joe is impossible to talk to __ because he's always out of town.

[以上 van Oosten (1977)]

k．Beavers are hard to kill __.

l．* A man would be easy to kill __ with a gun like that.

［以上 Lasnik and Fiengo（1974）］

（1a）～（1e）は統語的特徴である。難易構文では，for句にthereのような虚辞は現れない［＝（1a）］。不定詞は受動態が許されない［＝（1b）］し，不定詞節内の空所は時制文の中にあってはならない［＝（1c）］。空所は主語位置にあってはならない［＝（1d）］し，for句は2つ続いてはならない［＝（1e）］。

（1f）～（1l）は意味に関係する特徴である。難易構文では，進行相［＝（1f）］や副詞［＝（1g）］が生起可能である。理由節が後続する場合，性格など主語の恒常的な特質を表す場合は文法的である［＝（1h）］が，一時的な状況を表す場合は非文法的となる［＝（1i）］。しかし，alwaysを追加するなどして恒常的なレベルに引き上げれば，容認可能となる［＝（1j）］。また，難易構文の主文主語には，定名詞句の他，総称的表現が来るのは問題ない［＝（1k）］が，不定名詞句が来ると不可となる［＝（1l）］。

因みに，仮主語構文の場合で，難易構文と異なる特性を示すものを挙げておく。

(2)　a．It was tough for us to claim that he stole the money.［(1c) に対応］
　　b．It was hard for us to believe John to be honest.［(1d) に対応］
　　c．It was tough for Bill for Mary to publish the article.［(1e) に対応］
　　d．*It is being easy to please John.［(1f) に対応］
　　e．*It is intentionally easy to please John.［(1g) に対応］
　　f．It is impossible to talk to Joe because he is out of town.［(1i) に対応］
　　g．It would be easy to kill a man with a gun like that.［(1l) に対応］

forが2つ並ぶ例を難易構文を形成しない構造から，更に2つ挙げてみる。

(3)　a．It is bad for her for him to smoke.
　　（彼がタバコを吸うことは，彼女の健康に悪い）
　　b．It is comfortable for the poor for the rich to fail in business.
　　（貧乏人にとっては，金持ちがビジネスで失敗することが心地よい）

(3a) はhimとherの関係が夫婦であれば不自然ではない。但し，この文において，for句を1

つだけ用いると，bad の側につくものと考えられる。それが証拠に（4b）が不可で，(4c) が OK である。

(4) a．It is bad for him to smoke.
b．*For him to smoke is bad.
c．To smoke is bad for him.

仮主語構文では，for 句と不定詞が強く結びつくか，for 句と形容詞が強く結びつくかは，動詞や形容詞の意味的特性によるが，難易構文においては，そのような特徴は見られない。むしろ，難易構文の for 句は，主節に属するものと考えられる。その for 句は，前置も外置も可能だからである。

(5) a．For the children, the problem was difficult to solve.（前置の例）
b．The problem was difficult to solve, for the children.（外置の例）
[Nanni (1978)]

以上のように極めて特徴的な振る舞いをする難易構文に関し，従来の分析，特に＜難易構文には NP 移動が関わっていない＞と言う考え方を概観し，この考えの矛盾点を指摘し，これを一歩進めて，新たな角度から捉えて説明することが，本稿の目的である。

1．難易構文分析の歴史を分析する

難易構文の従来の分析は，(Ⅰ) NP 移動分析，(Ⅱ) WH 移動分析，(Ⅲ) 目的語削除分析の 3 つに大別できる。

(Ⅰ) は，Ross (1967)，Postal (1971)，McCawley (1998) などにより，(Ⅱ) は，Chomsky (1977)，Browning (1987)，Contreras (1993) などにより提案された。また，(Ⅲ) については Lasnik and Fiengo (1974) によって唱えられた。

(Ⅰ) の分析の代表格である Postal (1971) によれば，(6a) の基底構造の for Tony to hit Jack が外置され，その目的語 Jack が主節に繰り上げられて派生するのが難易構文であるとする。

(6) a．[it [for Tony to hit Jack]] was difficult

b．[it __] was difficult [for Tony to hit Jack]

c．Jack was difficult [for Tony to hit t]

[Postal (1971)]

NP分析の弱点は，理論上の説明力の欠如にある。

(7) a．For Tony to hit Jack was difficult.

b．It was difficult for Tony to hit Jack.

c．Jack was difficult for Tony to hit.

この分析では（7a～c）が全て同義であることを前提としているが，これが理論的な弱さを露呈する。(7b）と難易構文である（7c）とは明らかに振る舞いが違うからである。NP移動分析では，先にあげた(1)および(2)の例文における文法性の差を明確に説明できないのである。例えば，(1f）のJohn is being easy to please.（ジョンは喜ばせ易いふりをしている）の文が非文の（2d）即ち，It is being easy to please John.（？ジョンを喜ばせることはた易いものでありつつある）から派生したことになる。日本語の対応もまずくなることから，直感においても明らかなように，とても派生関係があるとは言いがたいのである。

これに対し，Chomsky（1977）は難易構文がWH移動と関係があると指摘し，WH疑問文と統語的特徴を共有することを示している。Chomsky（1977）の例文を少し修正して示す。

(8) a．John is easy （for us） to please t.

b．John is easy （for us） to convince Bill to tell Mary that Tom should meet t.

c．* John is easy （for us） to convince Bill of the need for him to meet t.

(9) a．Who did John please t?

b．Who did John convince Bill to tell Mary that Tom should meet t.

c．* Who did John convince Bill of the need for him to meet t.

(8)と(9)により，難易構文とWH疑問文は，共に，単一の文内に空所を持ち，多重に埋め込まれた節からの要素の抜き出しを許した結果生まれたものであることが分かる。また，共に，名詞句の島からは抜き出せないのが分かる。移動前は共に的確な文であると言えよう。

(10) a. It is easy (for us) to convince Bill of the need for him to meet John.

b. John convinced Bill of the need for him to meet who?

更にWH移動との共通点の極めつけは，寄生空所と共に生じることが可能であると言うことである。

(11) a. These papers are easy to file t without reading e.

b. Which papers did you file t without reading e?

(11)文で，eは寄生空所を示している。寄生空所構文における特徴として，「真の空所は非項位置への移動（非項移動）による痕跡によって認可される」と言うことである。項位置（A位置）に移動する(12)の構造（受身構文［a］と繰り上げ構文［b］）においては寄生空所は認可されない。

(12) a. * John was killed t by a tree falling on e.

b. * Mary seemed t to disapprove of John's talking to e.

[Engdahl (1983)]

従って，難易構文が寄生空所を認可すると言うことは，痕跡は非項移動の結果と言うことになる。そこで，NP移動が関わっているとは考えられないのである。NP自体が項であるから，主題表示される位置（θ位置）や主題表示されない位置（θ'位置）のいずれに移動する場合も，項位置にしか移動できないからである。そこで，Chomskyは次のような構造を提案している。

(13) John is easy (for us) $[_{s'}$ who → ϕ $[_{s}$ PRO to please t]]

つまり，whoがpleaseの目的語の位置に生じ，その後の操作により削除される。尚，Chomsky (1981) では，音声形式をもたない空演算子 (O) が移動すると修正案を出している。

(13)の構造には，PROが存在するので，thereが生じないこと［(1a)］や語彙的主語が生じないこと［(1e)］などが説明できるが，NP移動分析の場合同様，(1f～l) の現象の原理的説明が難しい。

難易構文分析の第3の提案，NP移動やWH移動ではない，目的語削除という発想について考

察する。

(14)　a．Someone took advantage of Mary.

b．Advantage was taken of Mary.

c．* Advantage was easy to take of Mary.

上の（14b）は，受身の構造でなんら問題のない文である。受身形態素 taken は格付与能力がなく，意味役割（θ役）のみをD構造で与え（θ基準を満たし），目的語（advantage）は格を求めてA位置（項が生じる位置）に移動する（各フィルターを満たす）。このときの移動は，意味役割を与えない位置でないといけない。というのは，音形のあるNPはθ役をすでにD構造で受けているので，主語位置ではθ役を受けてはならない。もし，この位置がθ位置（意味役割を与えられる位置）なら（14b）は非文となる。実際には，受身文の主語位置は，θ'位置と考えられるので，問題はない。

受身構文の分析から分かるように，一般にNP移動がθ位置からθ'位置への移動であれば文法的であると考えられている。ところが（14c）は非文であることから，もし，(14c）のadvantageがNP移動したと考えるなら，その移動先がθ'位置ではないと想定できる。Lasnik and Fiengo（1974）はそのような提案を行った。

Lasnik and Fiengo（1974）は，(15)の構造から，to不定詞節内の目的語を削除して得られると考える。

(15)　John is $[_{AP}$ easy $[_{PP}$ for us$]$ $[_{VP}$ to please John → $\phi]]$.

この分析によると，仮主語構文と難易構文は独立した構文と考えられるので，(1f～l）の現象についての説明の必要性はなくなり，また，この分析では難易構文における不定詞節をVPとしているので，(1a, b, d, e）の非文法性は自動的に説明できる。

2．目的語削除分析の「削除」を削除する

目的語削除分析は，難易構文だけでなく，その他幾つかの未解決の構文の説明も同時に可能となる点で優れていると言える。

(16) a. Mary is pretty to look at __.

b. The mattress is too thin to sleep on __.

c. The football is soft enough to kick __.

(17) a. * It is pretty to look at Mary.

b. * It is too thin to sleep on the mattress.

c. * It is soft enough to kick the football.

(18) a. Mary is easy to look at __.

b. * The mattress is thin to sleep on __.

c. * The football is soft to kick __.

もし，(16)の構文にNP移動が関係しているとしたら，(17)のような非文から派生したことになり，NP移動ではこれを説明できない。しかし，初めから主文の主語位置にも目的語が基底生成し，その結果，後ろの目的語が削除されるという考え方であれば，(17)から(16)が派生したという矛盾を説明する必要はなくなる。

また，(18b, c) が非文なのに，(16b, c) の文法的であることの説明もつく。というのは，to不定詞節はtooまたはenoughの補部であって，thinやsoftの補部ではないので，(18b, c) の構文に結びつける必要はない。この構文は別の原理で排除されるべきだからである。

(19) $[_{AP}\ [_{Det}\ [_{Deg}$ too/enough$]\ [_{S}$ to VP$]]$ thin/soft$]$

しかし，この分析には，分析をサポートするための例文に裏切られたような弱点が露呈する。つまり，目的語削除分析では，(16a) と (18a) は構造上同類になるのに，振る舞いが異なる。つまりprettyを含む構文は，難易構文の特徴を示さないことが [= (17a)] 問題である。簡単に言えば，何故同じ目的語削除と言う操作で生じた (16a) と (18a) の構文が，どうして振る舞いが違うのかを，この分析だけでは説明できない。

また，難易構文はNP移動と関係がないということを導き出すのに，(14c) が非文法的であることを根拠としていたが，これは間接的に「難易構文がNP移動に関わっていないこと」を示すに過ぎない点を見逃してはならない。

というのは，(20a) のD構造の文にNP移動を無理に適用すれば，(14c) で仮定されたように，主語位置がθ位置なので，Johnがθ役をD構造と移動先のS構造の両方から提供され，θ基準

を満たさなくなり，その結果，派生したS構造は破綻する。しかし，そのS構造は全く難易構文の構造と一致している。初めから主語を基底生成させて生じる難易構文がいかにして，無理に派生させた（20b）の構造を排除できるのか，そのことを説明できない限り，目的語削除分析は完全とは言えないと思われる。

⑳　a．e be [$_{AP}$ easy [$_{VP}$ to please John]]
　　b．*John is [$_{AP}$ easy [$_{VP}$ to please t]]

更に，advantageを㉑のように無理に基底生成させた場合，どうして難易構文が成立しないのかについては，全く説明できない。構造上は，全く難易構文となんら変わらないからである。何故，advantageのようなidiom chunkからの派生が目的語削除分析で説明できないのかを目的語削除分析で説明できなければならないという不思議なことになる。

㉑　Advantage is [$_{AP}$ easy [$_{VP}$ to take advantage …]]

また，そもそも難易構文を取る形容詞を用いた場合は，どうして目的語の基底生成位置が2つあり，しかも，主語位置の目的語が残り，目的語位置の目的語が削除されるのかを，これまでの生成文法上の原理で説明できることが望ましい。

直感では目的語は目的語位置で安定しているはずなのに，どうして，本家本元の位置と言ってもいい目的語位置をNPが避け，削除と言う現象が起こるのかを説明できた方が，「目的語削除理論」は強力なものになると思われる。

そこで，とりあえず新たな謎を生み出す「削除理論」における「削除」と言う発想を根底から洗いなおし，D構造は，削除理論で主張される（22a）ではなく，（22b）のようなものであると仮定したい。

㉒　a．NP［be [$_{AP}$ easy [$_{VP}$ to please NP]]
　　b．NP［be [$_{AP}$ easy [$_{VP}$ to please e]]

（14c）の現象がきっかけで，難易構文は目的語のNP移動が関わっていないということが分かった成果を踏まえ，この考え方は残しながら，新たな見方として，D構造に空所（e）が存在

すると仮定する。

そして，このNPが基底生成している主語位置は，項が生じるA位置（Argument position）で，しかもθ役を授与できるθ位置であると考えられる。従って，受身構文におけるように，θ'位置ではない。

すると，この位置にD構造で導入されるNPは，原理的には，この位置でIPの主要部から主格を授与され格フィルターを満足し，＜何らかの要素＞から，θ役を授与されθ基準を満たす。また，同時に空所eはeasy型の形容詞からの＜何らかの要因＞により認定されると考える。その結果，この構造は問題なく派生する。

以上に提案した，難易構文の分析を（マイナスイメージを感じる）「目的語削除分析」に代わって，（プラスイメージを醸し出す）「目的語上昇分析」と名づけることにする。目的語が＜何らかの要因＞で＜何らかの要素＞の影響を受けて，D構造で初めから目的語より統語的に上方にある主語として現出するからである。（移動するわけではないので，「目的語移動分析」とは言わない）

次節で，＜何らかの要素＞と＜何らかの要因＞における「何らか」の部分を解明する可能性について考察したいと思う。

3.「目的上昇分析による説明」を説明する

まず，懸案の2つの文を再度考察する。

㉓ a．John is easy to please.
　　b．* Advantage is easy to take of Mary. ［(14c)］

(23a) は純然たる難易構文で，(23b) は㉔文のadvantageをNP移動したために非文法的になっているということであった。

㉔ It is easy to take advantage of Mary.

この論理をそのまま，(23a) に適用して考えてみると，つまり㉕のようにJohnにNP移動を適用すると，やはり非文法的であると判断されなければならない。でも実際は（23a）は文法的で

あるから，NP移動が原因で，非文法性が言えているのではないということになる。

難易構文の主語位置が，θ位置であれば［㉕］，NP移動を適用すると，θ基準に反する結果，共に非文法的と誤って判断され，θ'位置であれば［㉖］，NP移動をしても，θ基準を満たすので，共に文法的であると，これも誤って判断される。

主語位置の特性が何であっても，㉓の文法性の差を説明できないのである。

㉕　a．* John is easy to please t.

　　b．* Advantage is easy to take t of Mary.

㉖　a．John is easy to please t.

　　b．Advantage is easy to take t of Mary.

前節で提案した「目的語上昇分析」でも，共に誤って文法的である［㉗］と判断してしまう。

㉗　a．John is easy to please e.

　　b．Advantage is easy to take e of Mary.

㉓における文法性の差は，take advantage ofの特性に関係しているものと考えられる。advantageと言う単語自体に問題があるのではない。㉘は問題ない難易構文である。

㉘　Advantage is easy to think of.　（好都合と言うものは考えやすい）

本稿では，より説明力があると思われる＜主語位置のθ位置説＞をとる。つまり，NP移動で難易構文が派生しない立場をとっている。

㉓の文法性の差は，主語位置でNPに授与されるθ役の種類に帰着するものと考えられる。ある特定の種類のθ役が主語位置に基底生成するNPに等しく授与されるものと考える。そして，難易構文が授与するθ役を担えないNPは，その時点でθ役を拒否し，その結果として，θ基準を満たさず，派生は破綻する。このように考えることができると思われる。

難易構文は，単に構造だけでなく，その文法性に意味が大きな影響を与えること［(1f～l)］を考慮すれば，文法性がθ役の種類に帰着すると考えて問題はないであろう。

take advantage ofにおけるadvantageに期待されるθ役が他のNPとは異なると思われること

は，項の種類が異なることからも支持される。

一般に項は次の3種類に分類される。

(29) a．真正項（true argument）
b．非項（nonargument）
c．擬似項（quasi-argument）

(29a) の真正項とはJohnやMaryのように完全に意味役割を持つものである。(29b) の非項とは，仮主語のit（例えばIt seems that John is sick. におけるit）や存在文のthere（例えばThere were three girls in the room. における there）などの要素である。(29c) の擬似項とは，これら2つの項の中間的存在で，天気や明暗，距離や時間のitやイディオム内のNP要素のこととされる。

(23b) のadvantageは，(29c) の擬似項に相当するので，真正項とはθ役の種類を超えて質が異なると考えてよいほどのものである。

本稿の目的語上昇分析において，「難易構文の文法性の差のカギを握るのはθ役であること」を論じたが，次の2つのことを解決しなければならない。

(30) a．如何にして難易構文の主語を認可するか。
b．如何にして空所を認可するか。

(30a) に関しては，次のように条件が重要である。主語位置はA位置でθ位置なので，格もθ役も共にこの位置で，元来目的語（＝主語）NPに与えられるからである。

(31) a．格フィルターを満たす。
b．θ基準を満たす。

格はIP主要部から，主格が与えられ，各フィルターを満たすと考えて問題はないであろう。元来目的語であると言えども，主語の位置に現れるので，主格が与えられて当然だからである。その証拠に，人称代名詞は主格の形をとる。

(32)　a．* Him is easy to please.

　　b．He is easy to please.

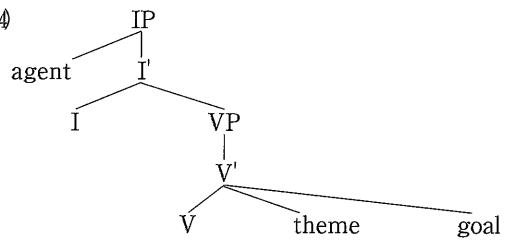
一般にVPは，主語位置のNPに対して，「間接的θ標示」を行うものと考えられている。本稿でもその考え方に従いたい。

(33)　John sent a parcel to London.

　　[agent]　[theme]　[goal]

(33)の例文では，VPからJohnに対してagent（行為者）というθ役が間接的θ標示され，Vから，a parcelに対して，theme（主題）というθ役，to Londonに対して，goal（着点）というθ役が直接的θ標示される。

(34)



(31b) のθ基準は，次のような条件であると再定義する。

(35)　a．音形を持つ真性項であるNPはθ役を1つ授与されなくてはならない。

　　b．NPが受容できるθ役とVPが授与できるθ役が一致しなければならない。

(35a) は，次の2つのことを自動的に条件としている。

(36)　a．θ役は授与されなくてはならない。

　　b．θは2つ以上の統語位置で授与されてはならない。[注1]

(36b) が意味していることは，本稿の難易構文の場合，例えば，「θ役を不定詞節内の動詞よ

り授与され，更に主語位置でも授与される」(言わばθ役割のダブルブッキング）ということがないということである。実際に本稿では，その立場を取る。

更に，VやVPは基底生成段階で，潜在的に複数の項構造を持ち，また，NPは基底生成段階で複数のθ役受容可能性を持つものと考える。派生段階（D構造からS構造へ展開していく段階）で，VやVPの項構造と，NPの受容可能性が制限されて，S構造で，項構造と受容可能性が照合される。[注2]

ここで，照合が成功すれば，派生は無事終了し，文法的文が生成される。もし，照合が失敗に終われば，派生は破綻し，文は非文となる。尚，照合の成功は，次のように定義する。

(37) VやVPの項構造におけるθ役の種類と，NPの受容可能なθ役の種類が一致する。

(37)は，簡単に言えば，「VやVPが与えたいθ役とNPが求めるθ役が同じ種類のものである」と言うことを要求していると言うことに他ならない。

(30b）については，形容詞の存在がカギを握るものと考えてよい。何故なら，形容詞により，空所が認可されない場合があるからである。

(38) a．John is easy to please e.

b．*John is possible to please e. [形容詞は難易構文を作らない]

(38b）の形容詞は空所を認可していないと言える。これに対し，難易構文を作る形容詞は，何らかの機構が働いて，空所を認可しているものと考えられる。この点については，今後の課題としたい。

4．項構造の複数性とθ役受容可能性

項構造の複数性に関し，(39)を考察する。

(39) ＜NP1 hit NP2＞

a．hit：(agent, patient)

b．hit：(patient, location)

c．hit：(theme, patient)

hitと言う動詞は，潜在的に（39a～c）の項構造を持つと考えられる。

また，項の側における「θ役受容可能性」については，次のように表記することにする。

(40) a．John：[agent / patient / theme]

b．the car：[theme / location / patient]

文法的文の派生は，(39)の項構造と(40)のθ役受容可能性を照合し，VまたはVPから与えられるθ役とNPが受容できるθ役が合致した場合にのみ，収束する。

(41) a．John hit the car.

b．The car hit John.

(41a) 文の場合，Johnという外項（＝主語）の持つθ役受容可能性の［agent］，［patient］そして［theme］の3つ全てが，(39a～c）の項構造を全て受け入れる素地があるが，hitと言う動詞の特性上，［theme］というθ役はJohnに与えられることはない。the carという項は，そのθ役受容可能性のうち，［patient］と［location］が，外項が［theme］でない（39a, b）の項構造を受容する。その結果，Johnに対して［agent］が授与されたとき，the carに対して［patient］が授与され，Johnに対して［patient］が授与されたときthe carに対して［location］が授与され，派生は成功する。

この派生によって生じる意味は，NP群（外項と内項を総合して便宜上呼ぶ）による項構造の受容可能性の数だけ，意味が曖昧になる。(41a）の場合は，次のように，意味が2つに曖昧になる。[注3]

(42) a．ジョンは車を殴った。　［(39a）の項構造をセレクトした場合］

b．ジョンは車にぶつかった。［(39b）の項構造をセレクトした場合］

次に（41b）文の場合は，曖昧性は生じない。the carが外項となる場合は，［theme］と［patient］が受容可能となるが，Johnが内項となる場合は［patient］のθ役しか受け付けない。

従って，この状況に合致する項構造は（39c）しか存在しない。しかし，合致する項構造が存在するので，派生は無事収束し，文法的解釈が可能となる。(41b）文の意味は，つぎのようになる。

(43) その車はジョンをはねた。[(39c）がセレクトされる]

ここで，次の文を考察する。

(44) a．John hit the car because he was careless.
b．John hit the car because he was irritated.

元来曖昧性を出現させる状況の構造でも，後続する副詞表現によって曖昧性が消えることがある。しかも，副詞表現の意味により，項構造が選択されているものと考えることができる。

(45) a．ジョンは不注意だったので，その車にぶつかってしまった。
b．ジョンはいらいらしていたので，その車を殴ってしまった。

(44a, b) の解釈は，それぞれ，(45a, b）が自然であろう。この場合，(45a）は項構造（patient, location）が選択され，(45b）は項構造（agent, patient）が選択されている。

5．θ役照合による問題解決

4節で触れた派生における文の認可過程で，意味役割を決定する機構を「θ役照合」と名づけることにする。このθ役照合により，難易構文の未解決の問題を幾つか処理できることを示したい。

(46) a．John is easy to please.
b．John is intentionally easy to please. [(1g)]
c．*It is intentionally easy to please John. [(2e)]

θ役をNPに授与する役目を持つVP，即ちbe easy to pleaseは次の項構造を潜在的に有する

ものと考えられる。項は外項1つなので，そのθ役可能性をスラッシュを用いて併記することにする。外項を示す下線は便宜上省略する。

(47) a．be easy to please：(theme / agent)
　　b．be intentionally easy to please：(agent)

そして（47b）が派生する段階で，項構造が限定されて，外項にはagentというθ役しか与えられなくなる。一方，Johnの持つθ役受容可能性は，4節で見たように［agent / patient / theme］の3つの可能性があるが，(46b）文に対して，VPからのθ授与と合致するのは，Johnのagent部分のみとなり，派生は収束する。

（46c）が非文なのは，Johnがpleaseの目的語位置に派生する段階で，θ役受容可能性が減少し，[patient / theme］となってしまい，(47b）が授与しようとする［agent］に合致しないからであると考えられる。[注4]

（46a）文の場合は，NPとVP間に共通のθ役は［theme］と［agent］なので，元来曖昧と判断されるのだが，「θ役授与傾向性」があると考えられる。特にコンテクストが要求しない限り，themeが優先されるのである。

更に，θ役のうち，theme（主題）は少なくとも，次のように分類されるものと提案したい。便宜上数字をつけて区別することにする。仮説の段階のθ役なので丸カッコで表記する。

(48) a．(theme 1)：［+ human］の素性がある主題
　　b．(theme 2)：［− human］の素性がある主題
　　c．(theme 3)：［+ time］の素性がある主題　（時間に制約される）
　　d．(theme 4)：［− time］の素性がある主題　（時間に制約されない）

そこで(49)と(50)を考察する。

(49) a．John is easy to please.
　　b．* The car is easy to please.
　　c．The car is easy to drive.
(50) a．Joe is impossible to talk to because he's stubborn as a mule. ［(1h)］

b．* Joe is impossible to talk to because he's out of town. [(1i)]

c．Joe is impossible to talk to because he's always out of town. [(1j)]

d．It is impossible to talk to Joe because he's out of town. [(2f)]

(49b) が不可なのは，the car が VP に要求するθ役が (theme 2) で，VP が提供できるθ役が (theme 1) だからである。[注5]

一方，(49a) では共に (theme 1) で，(49c) では共に (theme 2) であるから，正しい文が生成されるわけである。

また，(50b) が不可なのは，VP が (theme 3) を与えるのに対し，NP が (theme 4) しか受け付けないからである。(50b) 文は，時間制約を受けない Joe の性格がテーマだからである。従って，(theme 4) を共有する (50a) は適文と判断されるわけである。(50c) が適文なのは，always を入れることにより，because 以下が Joe の性格を匂わせることとなり，統語的には，(theme 4) のθ役を与える可能性が生じるので，文法的であると判断されるのである。

更に，(49d) が可能なのは，Joe が要求するθ役が (theme 4) ではなく，(theme 3) だからである。

最後に，イディオムと難易構文の問題に触れる。

(51) a．* Advantage was easy to take of Mary. [(23b)]

b．It is easy to take advantage of Mary. [(24)]

c．Advantage is easy to think of. [(28)]

advantage と言う語が持っているθ役受容可能性は [theme 2 / theme 4] であると判断できるが，take advantage of というイディオムを形成できるので，擬似項にもなることから，(quasi-theme) というθ役を設定できる。従って，advantage などイディオムを形成する抽象名詞は，次のθ役受容可能性を有するものと考えられる。

(52) [theme 2 / theme 4 / quasi-theme]

(52)のような可能性を秘めた advantage が基底生成し，難易構文の主語に導入される過程で，受容可能性が [theme 2 / theme 4] に縮小する。その結果，VP が要求する (quasi-theme) と合

致しなくなり，派生は破綻し，非文が生まれる。(51b) が問題ないのは，takeというVが (quasi-theme) を，NPに直接θ標示できるからである。目的語位置では [agent] のみが拒否され，(quasi-theme) をNPが要求できるのである。

(51c) が文法的なのは，主語位置のNPが要求するθ役が (quasi-theme) ではなく，しかもVPが授与するθ役に合致しているからである。

6．結　　語

難易構文のこれまでの分析において，完全な原理的説明ができない幾つかの現象に対し，これまでの分析とその弱点を簡単に概観し，意味論的，更には，語用論的な分野に関わる「θ役」に着目し，解き明かせていない若干の現象について，考察を試みた。

θ役の重要性を再考するに当たり，統語論の視点のみならず，意味論・語用論の観点も，難易構文分析には不可欠である可能性を示唆する結果となった。学際的な視点も導入し，更なる謎の解明を進めることを，今後の課題としたい。[注6]

注

1．同じ位置からは2つ以上の種類のθ役が与えられる場合がある。

(i)　John　hit　the car.

a．[agent]　[patient]

b．[patient]　[location]

(i) の文は曖昧である。もし (ia) のようなθ役が与えられたら，「ジョンはその車を殴った」と言う意味になり，(ib) のようなθ役が与えられたら，「ジョンはその車にぶつかった」の意味になる。このことは，VPからagentとpatientという2つのθ役がJohnに与えられ，Vからpatientとlocationという2つのθ役が与えられているからである。それでもθ基準には違反していない。θ役の種類ではなく，θ役が授与される機会が複数あればθ基準を満たさないと言うことになるのである。

2．項構造 (argument structure) とは，動詞が動詞句内に現れる項，即ち，内項 (internal argument) と，動詞句外に現れる項，即ち，外項 (external argument) に対して与えられるθ役の種類を，以下のように表記したものを言う。外項は通例主語NPで，それに対して与えられるθ役に下線を引く。

(i)　send：(agent, theme, goal)

3．例えばJohnが大男でプロレスラーのような人ならば，(i) の文において，the carがpatientを選択する可能性がないとは言えない。つまり，新たな (ii) のような項構造が想定できる。これは極めて特殊なので，本稿ではこの特殊な項構造を省いて単純化した。

(i) John hit the car. (ジョンが車にぶつかって，車が被害を受けた)

(ii) hit：(theme, patient) /John：[theme]

John には意志がないので agent の θ 役は受容できない。

4．V (または VP) の項構造可能性の減少は，副詞表現などの派生により，NP の θ 役受容可能性の減少は，NPの基底生成位置 (或は移動位置による) と考えられるが，この「減少」という現象が，どうして全く異なる機構で起こるのかは，今後の研究課題としたい。

5．いわゆる「選択制限」と言う現象は，θ 役の不一致減少に還元できるものと思われる。

6．難易構文は極めて語用論との関わりは緊密である。

(i) John is easy to please.

(ii) It is easy to please John.

語用論の視点からは，(i) と (ii) では発話状況が全く異なる。(i) においては John を話題にして発話が行われている。(ii) では，むしろ easy の箇所が話題と言えよう。両者の差を表す訳は次のようになる。

(iii) a．ジョンという人はね，すぐ喜んでしまうような人だよ。[(i) の訳]

b．簡単なことがあるんだよ，それはジョンを喜ばせることなんだ。[(ii) の訳]

参考文献

Browning, Margaret (1987) *Null Operator Constructions*, Doctoral dissertation, MIT.

Chomsky, Noam (1977) "On Wh-movement," *Formal Syntax*, ed. By Peter W. Culicover, Thomas Wascow, and Adrian Akmajian, 71－132, Academic Press, New York.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Contreras, Helles (1993) "On Null Operator Structures," *Natural Language and Linguistic Theory* 11, 1－30.

Engdahl, Elisabet (1983) "Parasitic Gaps," *Linguistics and Philosophy* 6, 5－34.

石井隆之，中本明子 (2002)「形容詞 impossible と possible の統語的特性に関する一考察」『近畿大学語学教育部紀要』第 1 巻 2 号，91－106.

Lasnik, H., and R. Fiengo (1974) "Complement Object Deletion," *Linguistic Inquiry* 5, 535-571.

McCawley, James D. (1998) *The Syntactic Phenomena of English* (2nd edition), Chicago University Press, Chicago.

Nanni, Deborah L. (1978) *The Easy Class of Adjectives in English*, Doctoral disseattion, University of Massachusetts.

Postal, Paul M. (1971) *Cross-Over Phenomena*, Holt, Rinehart and Winston, New York.

Ross, John R. (1967) *Constraints on Variables in Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.

van Oosten, Jeanne (1977) "Subjects and Agenthood in English," *Papers from the Thirteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, 459－471, Chicago Linguistic Society, University of Chicago, Chicago.